さんけん新聞

発　行
特例認定
ＮＰＯ法人
三段峡―太田川
流域研究会
（代表・本宮炎）

〒731－3813
広島県山県郡
安芸太田町
柴木 1734
☎090・
3421・3046
◇
https://sanken-hiroshima.org/

風力発電計画の環境アセスメント方法書縦覧
講演会・ふりかえる会で情報提供

西ウインドファーム（仮称）の風力発電所建設計画の環境アセスメント方法書の縦覧が、1月26日から1か月間あった。地元説明会は6回開かれ、住民からは質問や不安の声が出された。「西ウインドファームを考える会」は地元有志の会と共催で、講演会と「方法書説明会をふりかえる会」を開いて、情報提供に取り組んだ。ともにユーチューブで視聴できる。

参加者からも意見が出された「ふりかえる会」

大規模土砂災害の引き金
日本地質学会会員・越智秀二氏

廿日市市吉和で二月六日、日本地質学会会員で防災士の越智秀二さんが「防災の視点からみた吉和地区の風力発電施設について」と題して講演した。

越智さんは、事業想定区域の崩れやすい地質や活断層、南海トラフ地震の影響などを解説。過去の土石流や大規模化する最近の土砂災害の実例を写真や地形図、データを示しながら危険性を指摘した。特に稜線部の改変や山腹への取付道路建設に警鐘を鳴らした。

講演後、吉和で地域おこしに取り組む深瀬憲司さん、則武宏承さんらと方法書への意見書を集める協力体制を話し合った。安芸太田と吉和の観光や地域づくりでの連携も約束した。

専門家 方法書の見方解説
一〇〇〇通の意見書提出を呼びかけ

筒賀福祉センターで二月二十日、「ふりかえる会」が開かれ、越智秀二（地質・防災）、金井塚務（動物）、清水正弘（景観）の三氏が、専門家の見地から方法書の見方を解説した。

金井塚さんは道路建設による山の乾燥化、自然の生産力低下がクマ出没の要因などと解説。行政や議会、住民に自然保護への共感を得るのが大切だと訴えた。

清水さんは景観や人と自然とのふれあいの価値について、事業者は歩み寄ろうとする姿勢がなかったと話し、景観法の「良好な景観」などについて説明した。「考える会」は方法書に対し、一〇〇〇通の意見書を提出しようと呼びかけた。

集落等ネットワーク圏形成事業
4地区でヒアリング

さんけんと安芸太田町地域づくり課が進めている総務省の集落等ネットワーク圏形成事業のヒアリングを二月十二日と二十五日、三段峡観光同業組合と柴木自治会などにした。事業実施へ向けてのニーズの把握が目的。

今井勝則同業組合長、小林久哉同理事からは三段峡の将来像の考えを聞き、ゴールデンウイークのイベント内容も協議した。

柴木自治会と柴木財産会からは六人が参加し、地域の課題や実施したいイベントなどを聞いた。さんけんが事務所を置く柴木地区の役員と会合を持つのは初めて。柴木を含めた旧小学校区の梶ノ木、板ケ谷、川手の三地区でもヒアリングを実施した。各地区からは「若者の仕事がない」「地域の自信がなくなっている」など切実な課題が聞かれた。

子供向けツアー発表
「自然塾」で展開へ

環境省のアフターコロナ誘客補助事業「子供向け環境教育ツアー開発講座」で作成されたプログラムの発表会が二月十一日、二十五人が参加して、川・森・文化交流センターで開かれた。四チームの発表はオンラインでも配信され、橋本博明町長ら十人が視聴した。

ママさんグループは四季を生かした幼児の自然体験、二人の中学生は小学生を対象にした環境教育を提案した。これらの企画は来年度、さんけんの自然塾として展開する。

地域連携で観光促進

アフターコロナの地域観光を考える本年度のプロジェクトの成果を発表する会議が二月九日、安芸太田町役場で開かれた。十四回のワークショップ、二回の講座とモニターツアーを実施、地域観光のビジョンを話し合った。

今後、地域連携の観光を促進し、参加する事業者や店舗に掲示する、取り組み紹介ステッカーの作成が決まった。

一口メモ

▼開発の脅威

東日本大震災から十年が経つ。爆発した福島原発の廃炉は、全く見通しが立たない。三段峡は一九二五年、名勝指定されたにも関わらず、峡内へのダム建設の話は消えなかった。戦後、上流に樽床ダムが建設され水質は悪化した。今、風力発電計画がある。ときを経て開発の脅威に晒される。

南峰と歩く ㊸ 繰絲滝（くりいとだき）
木が茂り見えるのは最下部のみ

熊南峰の集大成と呼べる「三段峡案内」が一九二六年に刊行された。十三章「峡中の各景勝」で、黒丸を付けて項が立てられているものが最終的に決定した景勝と言え、県による名勝調査報告もこれをほぼ踏襲している。鴛鴦淵に接し、上流の対岸に繰絲滝が懸かる。

■山上から一條の滝

木が茂って最下部以外は隠れているが、昔はよく見えたらしい。南峰は同書で「山上から一條の細長い優しい滝が」「嬋娟（せんけん）として岩間を縫って落ちる容姿は、げに繰絲滝の名に相応しい」と書く。

名付け親は、名勝指定調査で来峡した国府犀東である。元は白糸滝と言った。「三段峡案内」では以前にはなかった項が立てられ、独立した景勝とした。南峰が犀東による命名を尊重したのが分かる。

■文化の溝　深さ知る

犀東（本名＝種徳）は金沢市出身の文章家で、和漢の文学、歴史に通じた知の巨人である。勅語の作成、つまり天皇のゴーストライターを務めた。金沢三文豪の一人、室生犀星は同郷の犀東から号を取った。が、今では犀東を知る人は少ない。

「逢著嬋娟小水簾　潭清崖下鏡開匳　忽括素練千絲雪　一撒天花撲笠檐」の詩を読みも解説も無く南峰は載せる。戦前との文化の溝の深さを知る。（松尾俊孝）

この人
野草と自然が大好き
玉川　洋子さん

温井ダム湖畔にある「きっちんたまがわ」のママさん。安芸太田町津浪でカタクリが自生しているのを見つけ、役場や後にさんけんの理事になる白川勝信さんへ連絡した。野草が大好きで地元の自然を愛する。

三段峡へ入ったのは２年前、ガイドブック出版記念の観察会が初めてだった。清流と豊富な種類の植物があるのを知り、その魅力に惹かれた。苦労してでも行ってみたいと思われるように発信出来たらと思う。三段峡を入り口として温井ダムや井仁の棚田、龍頭峡を知ってもらい、ゆっくり癒しを感じて欲しいと願う。（宏）